

## 本号掲載の論文要旨

### 忠こそ巻における

#### 和歌表現の方法

―『古今和歌六帖』との関わりを中心に―

内藤 英子

一条北の方と橘千蔭の和歌の贈答を中心に、忠こそ巻の和歌表現の方法について、『古今和歌六帖』との関わりを中心に考察する。まず、歌語「浅茅」「葎」「蓬」の忠こそ巻での意味を『古今六帖』第六帖「草」部の歌題との関わりから考察する。次に「菅原伏見の里」の意味をその引歌から考え、さらに、忠こそ巻の和歌が歌語の連想によりゆるやかに連続して詠まれていることと、『古今六帖』の歌題内の歌の連なりが和歌表現に影響していることを明らかにする。

### 茨木のり子の

#### 詩人としての人格の形成

―豊かな感受性から軍国少女へ、死の意識から対話の希求へ―

熊谷 誠人

二〇二二年にNHKで放映された茨木のり子の特集番組に参加したことで、彼女の少女期を通史的にとらえ直した。茨木の少女期を、A豊かな感受性が育まれた小学校時代・B軍国少女になりおおせていた高等女学校時代・C死の意識からの再生を果たした専門学校時代の三期に分節化し、その変容を考察することで、詩人としての人格がどのように形成されていったのかを論じた。その中で詩「わたしが一番きれいだったとき」に描かれている原体験について述べた。

### 貝原益軒「本草綱目品目」・

#### 貝原好古『和爾雅』における

#### 俚言

―益軒『大和本草』との対照―

鬼頭 祐太

貝原益軒『大和本草』の記述を参考に貝原益軒「本草綱目品目」、貝原好古『和爾雅』両書における俚言の利用を検討した。「本草綱目品目」で俚言であることを明示するのは四箇所あるが、その他に俚言であることを明示した箇所はなかった。『和爾雅』は一例を除いて明示されない。対照の結果、「本草綱目品目」には五一例、『和爾雅』には五九例の俚言の利用が認められた。特に益軒・好古の出身地である筑前（筑紫）の俚言が多数確認できた。この結果は彼らの学問に彼らの出身地が影響したためと考えられる。

「おきる／おこる」と

「おこす」における

自己対応関係の史的変遷

平野 杏

日本語の自動詞「おきる」「おこる」と他動詞「おこす」は、互いに対応する意味を持つ。この三語は自動詞と他動詞が一对一の対応を持つ他の多くの日本語の動詞と異なり、自動詞二つと他動詞一つが対応する動詞群である。この研究では、自動詞の主語と他動詞の目的語に着目して調査を行った。有情物と非情物の両方を対象に取る「おこす」との対応を観察し、「おきる」は主に有情物を主語とし「おこる」は主に非情物を主語に取るというように、意味を分担して担っていたのが、明治時代以降徐々に重なりを見せるようになったことがわかった。

近世後期における

テクレル・テモラウの

非恩恵用法

山口響史

本論文では、近世後期にみられるテクレル・テモラウの非恩恵用法（複文の形をとるもの）の違いを明らかにした。近世後期資料の調査の結果、テモラウの非恩恵用法は与え手が聞き手である場面で用いられ、丁寧語を伴う場合があった。一方、テクレルの非恩恵用法は与え手が聞き手となる場面でもならない場面でも用いられ、丁寧語は伴わなかった。これらの調査の結果から、テモラウの非恩恵用法はテクレルの非恩恵用法に比して相対的に聞き手（与え手）への配慮的な機能が強い用法であったと考察した。

キリシタン文献・

ローマ字本のウ段長音表記

変遷について

千葉軒士

本稿は、キリシタン文献・ローマ字本におけるウ段長音表記の変遷の要因として印刷の影響について検討するものである。ウ段長音表記対応箇所には複数のアセント符号が併用されたのは、版面担当者の最終判断で許容された可能性が高い。版面担当者がこの対応をとったのは、そもそもウ段長音に才段長音のような音韻的対立が見られないためで、本語におけるアセント符号の利用と同様にuの上は何らかのマークを付すことで視覚的に単なるuとは異なることを明示することにつながったためである。